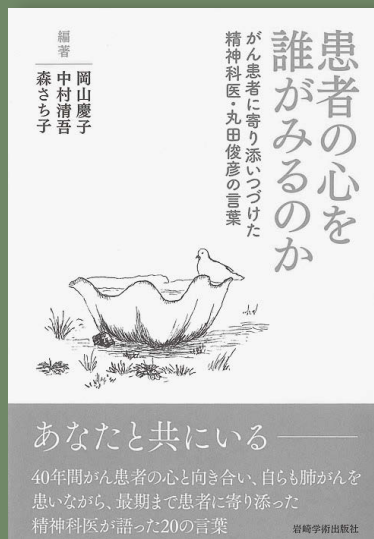


書評

患者の心を
誰がみるのかがん患者に寄り添いつづけた
精神科医・丸田俊彦の言葉

- 編著 岡山慶子／中村清吾／森さち子
- 定価 本体 1800 円＋税
- 発行 岩崎学術出版社

評者

慶應義塾大学病院 薬剤部長
慶應義塾大学薬学部医薬品情報学講座 教授
望月眞弓

患者にどう接してよいか迷っている時、
接し方を間違えたと落ち込んでいる時、
明日を指し示してくれる 1 冊がん患者に、
医療者は何ができるか

丸田俊彦先生は、精神科医として米国メイヨ・クリニックで 32 年間臨床実践を続け、とりわけ「がん患者」の心のケアに取り組まれた医師である。自らも「がん」を患いながら、最後まで患者の心とともに生きることを実践した方である。

2 人に 1 人ががんになり、男性は 4 人に 1 人、女性は 6 人に 1 人ががんで亡くなるという時代。家族や職場、学校で周囲を見回せば、必ずや「がん」を抱えた人がいる。「がん」であることを表明している人もいれば、ひっそりと闘病している人もいる。「がんの告知」が「死の宣告」と同義と思われていた時代と違って、近年は「がん」は不治の病ではなく、治癒も可能な病気となってきており、治療しながら仕事を続けることも当たり前になりつつある。とはいえ、「がん」を告知された患者が受ける衝撃は、未経験者には計り知れない。そうした衝撃を受けた患者に、医療者は何ができるであろうか。

“available”

丸田先生が遺された言葉をまとめた本書には、「共感」「寄り添う」といった「がん医療」でよく耳にする言葉が並んでいる。一方で、初めて耳にする言葉もいくつもある。

その 1 つが“available”（アヴェイラブル）である。英和辞典的には「利用可能」という訳になる。しかし、丸田先生の言う“available”は、「あなたのために私はいつでもここにいますよ」という姿勢を意味している。相手のために何かをするということではなく、その人が必要と

するときに手を差し伸べる“available”な存在であることが、真に患者に寄り添うことなのだと言っている。

私自身、悪性疾患で化学療法を経験した過去を振り返ると、家族が普段通りに生活し私に接してくれていること、それで十分癒されていた気がする。あの時、私の家族は“available”な存在であったのだと思う。

「間主観性」

もう 1 つ印象に残った言葉に「間主観性」がある。私は「ループリック」を勉強した時に、この言葉を聞いたことがある。「ループリック」とは、学生の学習効果をパフォーマンスという観点から評価する際の評価基準である。

パフォーマンスの評価は多次元・多段階であり、多くの場合そこには、評価者の主観が入り込む。一方、「ループリック」では、複数の評価者の主観をモデレーションし評価の一貫性を確保する。この状態を「間主観性」と呼ぶらしい。がん医療に置き換えると、「患者の主観と医療者の主観に折り合いがついて、調和した主観となること」と言えばよいだろうか。「間主観性」とは、「共感」に連動するものであるという。

*

このように丸田先生の言葉は、奥深く、哲学的でありながら、読者の心にすっと入ってくる。本書は、患者にどう接してよいか迷っている時、接し方を間違えたと落ち込んでいる時、明日を指し示してくれる 1 冊である。